

九州方言指定・比況助動詞活用分布相

吉町，義雄

<https://doi.org/10.15017/2332968>

出版情報：文學研究. 38, pp.139-158, 1949-12-20. 九州文學會
バージョン：
権利関係：



九州方言指定・比況助動詞活用分布相

吉 町 義 雄

- 一 九州方言指定助動詞活用分布相
- 二 九州方言進行助動詞活用分布相
- 三 九州方言條件助動詞活用分布相
- 四 九州方言比況助動詞活用分布相

一

『口語法調査報告書』第三十七條は言葉の末に斷定の「デアル」を約轉して「花ダ」「賑ヤカダ」等又は「花ヂヤ」「賑ヤカヂヤ」又は「花ヤ」「賑ヤカヤ」等の何れを用いてあるか。又「花デス」「賑ヤカデス」等或は「花下ス」又は「賑ヤカダス」等の何れを用いてあるか、更に右二類三様の活用に於て過去「ダッタ」「デシタ」未來「ダロー」「ダッタロー」「デショロー」「デシタロー」等是如何用いてゐるかに就ての回答が集めてある。

『口語法分布圖』第十九「だ」「ぢや」「や」等ノ分布圖」では、「ダ」（樺）は東日本と京都・島根・佐賀・宮

崎の一部、「チャ」(青)は岐阜・富山・滋賀・大阪の一部と四國・中國・九州、「ヤ」(黄)は畿内一部、「ダ」
「チャ」並用(茶縦横線)は愛知・鳥取・島根の一部と熊本全部、「チャ」「ヤ」並用(黄地青横線)は北陸・近畿
大部分、「ダ」「チャ」「ヤ」並用(黄地青横赤縦線)は富山・滋賀・京都一部となつてゐる。

第二十圖「「です」「どす」「だす」等ノ分布圖」は、「デス」(樺)は關東・中部全部と他に一部宛殊に中國・
四國の半を占め、「ドス」(青)は滋賀・福井一部、「ダス」(黄)は兵庫・熊本全部と大阪・奈良・愛媛一部、ダ
にシの轉じ添ふた「ダス」は東北地方南半、「デス」「ダス」並用は三重・奈良、「デス」轉訛「ダス」並用は奥羽
北半と福島一部、「デス」「ドス」並用は京都・滋賀、「ドス」「ダス」並用は京都一部、何れをも用いざる地方は
中國西部、四國北部、九州大部と新潟一部になつてゐる。

『口語法別記』には過去未來形と共に右の様相が略記されており、尙「アリマス」「ゴザイマス」に就て觸れてあ
る。

『九州方言調査表』9頁助動詞第一欄上に

指定はチャ・チャッタ・チャローか、ダ・ダッタ・ダローか、又はヤ・ヤッタ・ヤローか。

と刷込んだに對する回答は別表1の通り。調査會報告以上に新産物は見られない。

同第二欄上に

デスとダスと何れを用ふるや。

又^デッショ^ーと云ふか、^デッショ^ーと云ふか。

と刷込んだに對する回答は別表2の通り。九州一帯デスが支配してゐるが、未然形に於てマスの類推から^デッショ^ーとなる事が筑肥、壹岐に行はれる現象は調査會報告では得られない知識である。

調査表16 頁文章法第四欄上に

省略 特に人稱代名詞が主語に、名詞が客語の時、連辭や殊に助動詞を略す傾向ありや。

下に

オドン、九州人（私は九州人です）

と刷込んだに對する回答模様左の通り。

○アリ 福豊 9 前 9 後 14 佐 11 長 12 熊 18 鹿薩 3 隅 2 宮諸 3 日 3 大後 18 前 4

○ナシ 福豊 10 前 24 後 8 佐 15 長 22 熊 43 鹿薩 16 隅 11 宮諸 2 日 5 大後 22 前 2

○多イ 長 1

○少イ 福豊 1 前 3 熊 3 宮日 1 大後 4

○可ナリアリ 鹿隅 1

○多少アリ 福前 1 大後 1

○時ニアリ 福前 1 鹿薩 1 大後 1

九州方言指定・比況助動活用分布相

○稀ニアリ 熊1宮諸2

○略スコトモアリ 福後1長1熊1

○少クナイ 大前1

○餘リナシ 福後1熊1鹿薩1宮日1大後1

○大方ナシ 大後1

○殆ドナシ 長2

○不明 長1宮日1

○氣付カズ 鹿薩1宮日1

○助動詞略ス傾向アリ 熊2

即ち北東は有無伯仲、北西と殊に南は省略甚だしい。

註 別表1 「ヂヤッタ」「ヂャロー」等のものも採用、「ジャ」も採用。

福岡縣糸島郡一貴山村「ジャ・ヤ系」但し「ヤ」は用ひず、熊本縣に「ダ」「チャ【清音】」並用一。

別表2 單に「デッショ」「デシヨ」とあるものは「デス」へも算入、「ダス デッショ」は別々に此の通りに採用。福岡市「レッシュ」も「デッショ」へ算入。又福岡市「ダス」「近來デが多くなつて來た。」とあり。

明治三十八年六月『風俗畫報』第參百拾八號の大槻文彦博士「日本方言の分布區域」十六頁「京都の「どす」大阪の「だす」は「でおます」が約つて「でおす」となりそれが又約まつたものと思はれ東京の「です」は「でござります」が段々に約まつたものと思はれる「中略」此の「です」といふ言葉は明治維新前までは江戸で侍は勿論町人でも遣はなかつた卑しい言葉であ

つた〔中略〕随分古くはあるが藝人言葉で輕薄な口調で「でげす」などいふ言葉と同じで〔中略〕此の言葉が今の世に一般に行はれるやうになつたのは明治維新の後官軍の御國侍が江戸へ出て新橋あたりで藝者などの言葉を聞いて遣ひ始めて終に一般に用ゐるやうになつたものと思はれる〔中略〕斯く申す拙者なども卷き込まれて氣がつかず遣ふ〔中略〕此の言葉は東京から起つて今では〔中略〕全國到る所に行はれて來た」とある大同小異の記述は『口語法別記』にも再録されてある。

山口麻太郎氏『壹岐島方言集』昭和五年七月の一・二九頁「ネッショ」でせう。「デッショ」に同じ。「ネッスル」です。「然う——」同氏『續壹岐島方言集』同十二年二月の二九八頁「間に「デス」を「デッスル」の形に促音にする事あり。其他は連續、活用、用法共に標準語に同じ。」

『國語科學講座』昭和八年十一月の吉町義雄「九州の方言」六四頁「近代大阪の傳來か現代東京の影響か或は獨自發生か問題なる可き」「だす」「です」「云々。

新村田博士「方言史談」(昭和九年十月『方言』第四卷第一號、同十八年十一月『國語學叢錄』所收)にはデヤ・チャ・デスが扱はれてある。

中村通夫氏「デスの語史について」(昭和十一年三月『國語と國文學』第十三卷第三號)は口語法調査報告書を検して二〇頁(昭和廿三年十一月『東京語の性格』所收八九頁)「同書に於て顯著なる事實は東京語の影響として該語を使用する地方の多い事である。」二頁(九〇頁)「デスを用いない九州に於て、福岡縣の小倉市、佐賀縣の唐津町に用ゐらるゝが如き、宮崎縣東、西臼杵郡の項には、土族ハデストイヒ町人百姓ハ一般ニチャトイフとある如き、である。」又口語法別記を引いて二〇頁(一〇九頁)「ことに來遊する者の多かつたと考えられる九州は、口語法調査報告書によればデスの使用されない地方である。かれらに東京普通語と誤認され且つ採用せられ、現代的に使用されたのも、かれらが、この語と未知であつたことがあずかつて力あらう。」又起源については「デアリマス」「デゴザイマス」兩説を排し、山田説「デ、ス」安田説「デオウス」湯澤説「デ候」と吉澤方言説を推してある。

安藤正次教授『國語史序説』昭和十一年十一月の第七章「一元・統一の時代」に於て言文一致體に觸れ、二〇頁「山田美妙は

「デス」調、二葉亭四迷は「ダ調」の創始者として、後の「デアル」調の尾崎紅葉と相並んで、わが文學の上に、わが文章史上に不滅の功績を残すに至つたのである。

橋正一氏「デス・ダス・ドス」(昭和十二年三月『コトバ』第七卷第三號)は口語法分布圖も勿論見てゐないが語源説と分布論に清新味が掬され、四七頁下にはダスの分布として「九州では之がジャス(佐賀・長崎・日向)ジャンズ(日向)ダス(鹿児島市)ザッス(鹿児島市)ツァンス(鹿児島市)等となる。」

岩波講座『國語教育』昭和十二年六月の東條操教授「方言學」二二頁(同氏『方言と方言學』昭和十三年六月所收「東京語及び江戸言葉」二〇八頁、同十九年八月増訂版同)「この「です」は前章に述べた通り新しい言葉であるが、最近また「ダス」または「ス」に轉じて行く傾向も見える。」

五十嵐力博士『國語の愛護』昭和十三年十一月初版の第二「部分品」四六―九頁ではデスは多分「にて御座あり申す」の約轉で、「でござります」等から「でげす」「でえす」を経て由來したとする。

鈴木暢幸氏「助動詞「です」の用法について」(昭和十二年十月『國語教育』第二十二卷第十號)では口語法別記と同じく「でござります」由來説を主張し、「であります」説を否定する。

山本正秀教授「デアルの沿革」(昭和十八年九月『日本語學研究報告』第二十篇「國語國文學」や同十九年十月『橋本『進吉』博士還暦記念國語學論集』)では先入諸説文獻例證を整理して、古代にはなく中古形たる「ニテアリ」が室町中期には退場し、「デアル」が登場するが江戸期に入ると口頭語から消滅し、幕末には直譯語として再生し、明治十年代からは(恐らく四國九州の政客に發する)演説の結語となり、廿年代には小説に用ゐられ始めたとする。

調査表の頁文章法第四欄省略事象回答に於て、福岡縣若松市「本來ハ略セズ近時略スルノ傾向アリ」、同浮羽郡御幸村「客語が名詞以外の時もあり――オダゴンゴチャイ(私は嬉しい)」、佐賀縣西松浦郡大川村「連辭ハ略セズ助動詞ハ略スコトアリ」、同藤津郡多良村「子供にはあれども大人には少し」、熊本縣宇土郡轟村「連辭を略すること無し、助詞を略する傾向はあり、大分縣大分郡竹中村「ワ」はを省略することあり」、同速見郡南由布村「ハコレハ略ス事アリ」、同東國東郡武藏町「オリタチャ

「オリドー」の如く引きてはを略す、同中武藏村「オリド、大將　オリド知ラン」、同直入郡姫岳村「甲「お前はどこで貰ふたか」乙「俺ア竹田（で買ふた）」」

二

報告書第十九條は「指シテ居る」等を「指シテル」と云ふか、「指シテ居ル」等を「指シトル」又は「指シテヨル」等と云ふかの回答が載せてあり、是に由ると「指シテキル」は東都西京中心地區のみ、「指シテラル」は中部・中國の一部、「指シテル」は近畿以東、「指シトル」は中部以西（内「指イトル」となる所が中部地方や徳島・福岡にある）、「指シテヨル」は近畿以西である事になる。

重要な本課題を分布圖も別記も全然無視してゐる。

調査表10頁助動詞第一欄上に

他に特に頻出する又は特徴ともなる可きものあらば例示され度し。

と刷込めるに對し進行形を以て答へたるもの數通。

13頁助詞第七欄「のに」の下欄へ

行キヨル

と刷込めるに對し此の儘を肯定せるものを除いて回答模様左の通り。

○行キオル熊3 オツ熊2 鹿薩4 隅2 ヲル佐1熊1 ヲ1佐1 ヲツ佐2 ヲ長1 行ク^(オル)長1

○行キツチヨツ長1 イツヂヨヲツト長1

○行キヨル福後1佐1長1熊1大後1前1 ヲル福豊2前8後5長9壹1熊2大後4前1 ヲ1福後1 ヲン福後1

ヨン大後1

○行キヨツ(テタ)長2熊3宮諸1 ヲツ(テ)熊2 ヲツ(テタ)佐3長1熊1 ヲツ(テタ)福後1佐2長3熊

11宮諸1 行ツキヨツテ鹿薩1

13頁助詞第十欄「とて」の下欄に

生キトツタ

と刷込めるに對し「チヨツタ」等の書添あるもの左の通り。

福豊7前8後1佐1長4壹2熊0鹿薩7隅10宮諸2日9大後40前5

14頁助詞第一欄「なら」の下欄へ

爲^(ヨ)ツタ

と刷込めるに對し

○爲オツタ熊1鹿薩3隅1 ヲツタ佐1長1

○爲ヨツタ福豊1前1後3佐2長4熊2鹿隅1宮日1大後1 ヲツタ福前1後2長1宮日2大後2

○爲テオツタ佐1 トツタ福前1 チヨツタ鹿薩1 ジヨヲツタ長1 デヤツタ大後1

14 頁助詞第七欄「と」の下欄に

日ノ登ッ
ル

と刷込めるに對し

○ノボツトル福前1 ノボツチヨル福豊1長壹1宮日1大後3

16 頁文章法第三欄下に

降チヨラン

と刷込めるに對する書込回答左の如し。

○降オラン佐1 降リオラン長1 降リヲラン長1熊1 降^{7イ}ヲラン佐1 降イヲラン佐2 フイヲラン佐3 フロラ

ン長對1 降ラン福豊1佐1鹿薩2

○降リヤオラン福前1熊1 降リヤアオラン福前1

○降リヤシヨラン熊1 降リヤーシヨラン熊1 降リヤセン熊1 フリヤセン熊2

○降ツチオラン福豊1 降ツテオラン福前1 降ツテイヤーオラン佐1 降ツテニヤヲラン熊1

○降チャオラン福後3熊5宮諸1 降ツチャオラン福後1熊2鹿薩2 降ツチャーヲラン熊1 降ツチャ居ラン長1

フツチャオラン熊2 フツチャヲラン熊1

○降チヨラン福豊1前2後1 降チヨラン福豊1長1對1熊1鹿隅1宮諸1大後4前1 降チヨラン福豊2前1熊1

鹿隅2大後2 降ツチヨラン鹿薩2 降ツチヨラン佐1長1熊1鹿薩2宮諸1大後1前1 フツチヨラン鹿薩3

○降ッチョリヤセン福前1 フツチョヤセン鹿薩1

以上の外にも諸所に「チョル」と書添へたものを散見した。

『九州方言補遺回答表』黒刷第一回に

五 降リヨル

と刷込めるに對する記入模様次の如し。

○降リオル鹿薩1 降リヲル熊1 降リヲツ鹿薩1隅1 降リヨル大後1 フィオツ宮諸1 降レヨル大後1

○降チョル宮日2 降チョイ鹿隅1 降ッチョイ鹿薩1 フツチョツ鹿薩1隅1宮諸2 フツチイ鹿隅1 降ッヂョ

ツ長1 降ジョヲツ長1

○オジイオツ鹿薩1 オヂイオ、鹿薩1

註

調査表10頁助動詞第一欄上の書込回答は福岡縣京都郡泉村「繼續体において此は動詞の自他に關せず「ある」「てをる」を動詞の連用形に連ねてあらはす 例 降りてをる―降りよる 存在態↓降てる―降つちよる」、熊本縣上益城郡白旗村「行キヨルトカ（行キツ、アルカノ意） モドリヨルトカ（カヘリツ、アリヤノ意）」、大分縣大野郡戸上村「進行形にヨルを附す 遊ビヨル、シヨル 行キヨル、等」。其他「ヨル」福前一後一、「チョル」大後二。

13頁助動詞第七欄回答に於て「イ」又は「ユ」を抹殺又は書添へたもの「ユ」熊2鹿薩2大後1「イ」福豊5前16後17佐12長21壹1對2熊26鹿薩8隅8大後15前3。

同第十欄下回答に於て長崎縣南松浦郡魚目村「行キッチョツトニ」、熊本縣球磨郡久米村「行キヨッタツチャ」、鹿兒島縣日置郡串木野村「生キッオツテン」。

14頁助詞第一欄下回答に於て片假名書「シ」は凡て漢字「爲」に抱攝した。

16頁文章法第三欄下回答に於て他の語例もてせる書添は略した。そして「ヨラン」のみのものは「降ヨラン」と見做し、語尾「バイ」「カン」等書添は捨て、「ヨル」等は「ヨラン」に改めて算入した。

尙4頁子音第七欄上に「備考 右以外に何か特徴ありや。」と刷込んだに對し、種々の音韻現象回答中に「テオル↓チオル」としたものの福豊二前二鹿陸一隅一宮日三。

金田一京助博士「東北方言について」(東京中央放送局「ことばの講座」第一輯昭和八年十二月)第二節「過去完了」一九四頁「この點、丁度關西方言に、進行形が一つ細かに發達して、来る——來よる、出來る——出來よる、見る——見よると、云ひ分けてゐるのと共に、中央標準語を超えて生長した面白い東西の好一對の語形である。」

昭和十年一月『音聲學協會々報』第35號「コトタマ往來」(吉町)尾崎行雄氏「相模生、三重縣代議士」が昭和四年秋九大法文學部教室で講演をした時、自分は少しも氣が付かなかつたのに、筑後出身の某教授は氏が「よる」を演說中に發したのが可笑しいと笑つてゐた。

昭和十一年一月『音聲學協會々報』第40號「コトタマ往來」(吉町)「西日本の「よる」なる慣用法に於て、中國のは單なる進行形だが九州のは強勢の意があると説く人があるが、如何なものであらう。」

山口麻太郎氏『續壹岐島方言集』第三「語法篇」第五章「助動詞」九「時の助動詞」(2)進行態(繼續態)の助動詞(二九二—六頁)には現在進行態「チオル」過去進行態「チヨッタ」未來進行態「チヨロー」不定時進行態「チオル」現在存在態「チオル」(自動詞につく)「チアル」(他動詞につく)過去存在態「チヨッタ」「チアッタ」未來存在態「チヨロー」「チアロー」不定時存在態「チオル」「チアル」として文例も示されてある。

橋正一氏「ヨルといふ助動詞」(昭和十二年七月『國學院雜誌』第四十三卷第七號)75頁「ヨルは進行態(繼續態)であり、トルは存在態である。——かういふ事は早くから聞いて居た。しかし、今調べてみると、それほど單純でもない様だ、無論、さういふ地方もあるが、又、さうでない地方もある。」「そこで先づ、ヨルの分布を調べてみる。これは一口に西日本と言つて

よい。飛彈・美濃・尾張が東の限だらう。福井縣にもある。近畿地方は全部、中國も全部、四國も全部、九州も全部と言ひたいが、鹿兒島縣からは、今の所、發見されない。「ヨルの活用は、居る^ヲの活用と同じく、ラ行四段である」80頁「トルとヨルとの間には、やはり、差別があるらしい。その外、ヨルは大分、富崎、佐賀、長崎、熊本の諸縣にあり、いづれも進行形と報告されて居る。」

奥里將建氏『四國の方言』昭和十八年八月の五一頁には「立ットル」等が四國・中國兩方言圖の背面と九州方言圖では「立ッチョル」等といふ口蓋化を以て行はれ、抄物時代の原形「立チ居ル」等は兎も角、沖縄方言圖では「立ッチョウン」「起ッ^{ウキ}トウン」等といふやうに語に依つては直音形・拗音形の混用地帶となつてゐる指摘が見られる。

藤原興一氏「チョルことば」(昭和十八年九月『國語・國文』第十三卷第九號)二七頁「現代地方語の上では、これが旺に行はれてゐるのを見受ける。その第一は九州地方である。」「調査の結果では、九州も南方に行くほどこれの旺な状態が認められ、佐賀縣・福岡縣等はそれほどではないらしい。」「二八頁「チョルことばは九州方言の一特徴と言へる。次は九州に隣接する中國四國の状況であるが、中國山口縣下のチョルはかねて有名である。同じやうな状態が山陰の出雲地方及び隱岐にも見られる。」「轉じて四國はと見るのに、これ亦その西南部にチョルことばの地域と見ることが出来る。」「二九頁「第一に薩隅方言が就中古色に富むものと見られ、これに肥筑の方言殊に肥後肥前の方言がよく連る。」「日向より斜に筑前へかけては第二階段的な間衝地帶をなし、次いで豊後豊前の一區域が第三階段の地として認められる。」「チョルことばの九州全土に於ける消長状態も、一面これに合せて考へて見ることが出来る。」「として、更に「行つちみチ」や「て・ある」からのチャルやタルにも關心を示されてゐる。

報告書第三十八條は假説の言葉に「晴レタラ行カウ」「晴レタラバ行カウ」の如く「バ」を加へるか否か、又意味に變りはあるか、又「タラ」を「昨日尋ネタラ、居ラナカッタ」の如く過去にも用ゐるかに就ての回答があり、第十八「條件ノ云ヒ方」ノ分布圖に表されてある。是に由ると東日本、中國中央部、九州中南部に亘り更に近畿・四國一部は「書ケバ」であり(青)、佐渡・福井・山口・福岡・大分全部、山梨・愛知・京都・岡山・愛媛一部は「書キヤ」であり(黄)、滋賀・和歌山一部は「書イタラ」であり(赤横線)、其他並用九種別が見られるが、宮崎一部は「バ」「キヤ」並用、佐賀一部は「バ」其他の云ひ方並用である。別記は助詞の部に關係記事が散見する。

茶刷補遺回答表に

二 又假定の例へば「書いたらば」を 書コーバ の如く申す事がありますか。
と刷込んだに對し肯定返答左の通り。

【福】 倉 1

【佐】 杵 1

【長】 北高 1 北松 1

【熊】 鹿 1 球 1 天 4

同質問表に

四 例へば「子供ではあるまいし」「呉れるなら貰はうし」と云う場合 子供チャアルミヤーズ 呉ルルナラ貰オ
九州方言指定・比況助動活用分布相

「ズ」の様に「し」を「ズ」と言ふ事がありますか。

と刷込んだに對し肯定回答左の通り。

【福】 糸 1 福 1

井 1 潞 1 山 1 池 1

【佐】 佐郡 1 三 1 小 1 東松 1 佐市 1 唐 2

【長】 北高 2 南高 1 東彼 2 西彼 2 北松 2

對 1

【熊】 玉 1 鹿 1 阿 1 下益 1 飽 1 天 2

【大】 日 1

註 媽港版葡文『日本小文典』三卷一六二〇年の第一卷廿二頁（佛譯巴里一八二五年第一卷一八頁）には肥前に於て「求メバ」「求

メテアラバ」等を「求メオーバ」「求メテ アラオーバ」等と云ふ記述が見える。

湯澤幸吉郎氏「接續助詞「ば」の用法」（昭和十一年二月『國語解釋』第一卷第二號、同十五年二月『國語學論考』所收）では、推量助動詞未然形「う」に附く「ば」が假定に用ひられた古例が擧げられ、二五七頁「これは一般的にならなかつたが、今日尙「死ノバ」「行コバ」の如き形で、方言に残つて居る。」

「し」をズと云ふ問題は熊本縣天草郡赤崎村のは「ジ」、同支岐村のは「ジズ」と記してあつた。

永田吉太郎氏「終助詞私見、シを中心として——方言語法の問題（五）——」（昭和九年十一月『方言』第四卷第十一號）は分類地位が考察されてある。

四

調査表16 頁文章法第一欄上に

比況 ゴツかゴトかゴテの何れありや。

連體・終止形はゴトアルかゴタルか。

と刷込んだに對する回答模様は別表3の通り。

「ゴツ」は支配的であるが、西北九州は「ゴト」が對馬は「ゴテ」が勝つてをり、「ゴタル」は壓倒的であるが、北部と南部は「ゴトアル」が旺である事が解る。

右の外に左の種類を列舉出來る。

○グタル熊²

○ゴタ佐² ゴタ¹福前¹佐⁵鹿薩¹隅¹ ゴタア佐¹鹿薩¹ ゴタア¹佐¹ ゴタアル福前²熊¹宮日¹ ゴタイ
鹿薩¹隅⁵宮諸⁴ ゴタツ佐³鹿薩¹ ゴタール福前¹ ゴータル福後¹
○ゴチ長³熊¹鹿隅¹宮日¹大後¹ ゴチアル長¹大後¹前² ゴチャ鹿隅³ ゴチャアル長¹ ゴチャイ長¹鹿薩¹
1隅¹ ゴチャツ長²鹿薩² ゴチャール長¹ ゴツヂヤ¹鹿薩¹ ゴツヂヤイ鹿薩¹ ゴツヂ
ヤツ鹿薩¹

○ゴツアア鹿薩 1 ゴツアイ鹿薩 3 隅 4 ゴツアツ鹿薩 3 隅 2

○ゴテ 1 長壹 1 對 2 ゴテアル長對 1 大後 6 ゴテ 1 アル長對 2 大後 1

○ゴドツ佐 1 ゴトア 1 鹿隅 1 ゴトアイ鹿薩 1 ゴトアツ佐 2

註 別表 3 「ゴトアル」「ゴタル」兩用とせるものは極少數故、別々兩方へ算入。濁點有無は一切無視。鹿兒島には「ゴッ」「ゴッアル」が混ずるが今區別しない。

三矢重松博士「「ごとし」の論」(明治四十年一月『國學院雜誌』第十三卷第一號一七頁、大正十五年十一月増訂『高等日本文法』所收七九三頁)「「ごとし」は今の口語九州邊にては尙「ゴト」「ゴトアル」など用ゐらるれど、一般には「様ダ」といふ。」山田孝雄博士『奈良朝文法史』大正貳年五月の一三一頁「かくの如く、用法の局せるを見れば、こは元來副詞なりしにはあらざるか。而、こは亦琉球語の「グトゥ」「グトール」と同語なりと見ゆれど、用法に於いて差異あり。」

安田喜代門氏『國語法概説』昭和三年三月初版の第六章「形容詞」一二二頁で奈良朝以前には「ゴトクは見當らぬ。ゴトキ、ゴトシなどの用例も見當らないでまづゴトの用例ばかりあらはれてゐることは大いに注意するに足る。博多地方はその面影をのこしてゐる。」第十二章「副用語」二六六頁で室町時代口頭語につき「前例ゴトクは勿論、上方方言について言ふのでその時代の九州、(以下次頁)土佐、關東などでは、さうでなかつたかも知れない。」同氏『福岡縣の方言』(日本放送協會九州支部『放送講演集・九州方言講座』昭和六年五月) 37頁「普通は助動詞と言つてをりますが實は一種の形容詞なのです。そしてゴトクといふ場合に奈良朝以前では多くゴトといひ、平安朝でも多少、用ゐていたのですが、その古い語が博多及びその附近にだけ残つてゐるのは實に珍らしいことであります。」

吉町義雄『九州の方言』(昭和八年十一月『國語科學講座』) 67—68頁「形容詞「ごとし」の奈良朝時代に連用形として多く用ゐられた語幹「ごと」が其儘傳存したものか或は再轉したものか(以上67頁)は兎も角、殊に「善かごと」「善い様に」「善かごたる」(善い様な)などの語句は、是こそ筑紫方言が唯一的なものとして誇り得る最後の切札であらう。」

昭和十四年七月『音聲學協會々報』第58號「コトタマ往来」586(吉町)「山口縣長門部全部及び周防吉敷郡一部では接續助詞「のに」を九州方言「トニ」に似て「ソニ」「ホニ」と云ふが、同上領域では「様に」を全く琉球や九州と同じく「ゴト」と云ふのである。」

補

正

第三十四輯

頁 行

一七七

上六

ふしたん

文旦?

七

ふしゆかん

佛手柑

(比嘉春潮氏教示)

第三十六輯

一九五

一一

豊後、博多等の九州地方口語で打消の上ゲザ

ツタ等を盛に用いた事は長崎版『日本文典』

慶長九—一三年卷二の二五丁ウに見える。

九州方言指定・比況助動活用分布相

第三十七輯

頁 行

九八

一

je の e の上は、符

一二

ite の e の上は、符

一三

Moosme の e の上は、符

一〇六

一二

「w」 「j」

表 布 分 用 活 詞 動 助 定 指 1

並 用	ヂ ャ	ダ ャ	ダ ヂ ャ	ヤ	ヂ ャ	ダ	詞 動 助	
							國	縣
1	5	0	2	4	16	0	前 豊	福
2	16	1	1	10	25	0	前 筑	
1	4	0	2	0	37	0	後 筑	
2	4	0	4	1	31	2	前 肥	佐
1	8	0	1	1	56	1	前 肥	長
0	0	0	0	0	3	0	岐 壹	
1	1	0	0	1	2	0	馬 對	
1	3	4	16	2	43	40	後 肥	熊
1	3	0	0	1	29	0	摩 薩	鹿
1	1	0	0	0	20	1	隅 大	
1	1	0	0	0	10	0	縣 諸	宮
1	3	0	0	0	14	0	向 日	
0	2	1	3	0	65	2	後 豊	大
0	0	0	1	0	12	0	前 豊	
13	51	6	30	20	363	46	州	九

表布分用活詞動助定指 2

並 用	ダ シ ユヨ 1	ダッ シ ユヨ 1	並 用	デ シ ユヨ 1	デッ シ ユヨ 1	ダ ス	デ ス	詞	動	助
								國		縣
0	1	0	0	23	1	0	25	前	豊	
2	3	7	3	15	30	12	43	前	筑	福
0	0	0	2	12	22	0	36	後	筑	
0	0	0	2	21	9	1	34	前	肥	佐
0	0	3	4	28	16	4	55	前	肥	
0	0	0	0	1	2	0	3	岐	壹	長
0	0	0	0	3	0	1	3	馬	對	
0	0	0	5	33	60	1	101	後	肥	熊
0	0	0	0	12	1	0	17	摩	薩	鹿
0	0	0	1	6	0	0	10	隅	大	
0	0	0	0	5	0	0	5	縣	諸	宮
0	0	0	0	10	0	0	11	向	日	
0	0	0	0	70	0	0	74	後	豊	大
0	0	0	0	13	0	1	14	前	豊	
2	5	10	17	252	141	20	431	州		九

表 布 分 詞 動 助 況 比 3

ゴ タ ル	ゴ ッ ア ル	ゴ ト ア ル	ゴ テ	ゴ ッ	ゴ ト	詞 動 助		
						國	縣	
15	1	19	3	8	17	前	豊	福
42	2	17	1	17	33	前	筑	
46	1	1	3	46	9	後	筑	
29	0	4	13	11	25	前	肥	佐
53	1	7	21	15	36	前	肥	長
4	0	0	2	4	0	岐	壹	
1	0	1	4	0	1	馬	對	
113	4	0	54	89	24	後	肥	熊
4	2	10	2	35	8	摩	薩	鹿
0	0	3	3	18	3	隅	大	
8	0	0	1	11	0	縣	諸	宮
13	3	0	0	17	1	向	日	
48	6	12	14	36	23	後	豊	大
15	1	1	0	11	0	前	豊	
393	21	75	121	318	180	州		九